

高専学生によるフィリピン留学 ―その現状と今後の可能性―

渡辺 眞一

Studying English in the Philippines by Kosen Students

— Current Situations and Future Possibilities —

Abstract

Republic of the Philippines is attracting the most attention as one of the destinations for Japanese students who want to acquire English skills. Actually, four students in Kitakyushu Kosen studied in the Philippines in the summer of 2019, and the author had an opportunity to visit the country and observe eight different language schools. I would like to report the characteristics of each school, the result of the questionnaire conducted on the four students after the studying abroad program, and the change in the TOEIC Bridge scores before and after the program. Then I would like to consider the future possibilities of studying abroad in the Philippines by Kosen students.

Key words : Studying abroad, Philippines, Kosen students, Callan Method, TOEIC Bridge

1. フィリピン語学学校視察

私がフィリピン・セブ島語学学校視察の機会を得たのは2019年9月1日(日)から9月4日(水)のことである。一見3泊4日の日程ではあるが、初日現地ホテルに着いたのは午前0時過ぎ、また最終日ホテルを出発したのが早朝4時であったので、実質的には中2日での視察となった。なお訪問した8校は表1の通りである。

9/2	NILS SEIHA English Network セブ英語クラブ
9/3	SMEAG Kaisei English Academy ZA English Academy CG Academy EV Academy

表1: 訪問校一覧

2. 訪問校の詳細

ここでは上記訪問先8校の中で特に特徴的であった5校(NILS、SEIHA English Network、セブ英語クラブ、SMEAG、EV Academy)について述べることにする。

2.1 NILS

正式名称はNewtype International Language School、セブ島の経済特区であるITパークに位置し、周辺環境は島内随一であった。広い歩道には美しい街路樹が植えられ、ビルや店舗の雰囲気も他地域とは一線を画していた。NILSはこの地域のオフィスビルの5階にあり、ビルの入り口では入場者一人ひとりに対してセキュリティチェ

ックが行われていた。なお本校学生4名の留学先はこの学校である。

レッスンの特徴は他校でも見られた会話・語彙・文法・グループワークに加え「カランメソッド」が行われることである。カランメソッドとは英語のみを用いて英語を教えるダイレクトメソッドのひとつで、講師から絶え間なく出される質問に次々と答えていく間に文法や発音のまちがいを修正していくという教授法である。私自身も体験してみたがとにかく集中を要求され、さらにレッスン中はずっと発話しつづける必要があり、かなりの心的負担を強いられる活動であった。しかしながら本校留学学生の評価は極めて高く、最も役に立ったと述べる学生もいたが、これについては後述する。

また現地日本人スタッフがしっかりしており、学習面だけでなく生活面まで面倒見がよかった。毎日夜8時に寮での点呼があることも安心材料であった。

フィリピン人講師については、これは他の学校についてもいえることではあるが、とても明るくフレンドリーで好感が持てた。

寮の1階にはコンビニエンスストア(セブンイレブン)、留学学生の食事場所となるカフェがあり便利である。部屋は4人部屋で2段ベッドが置かれた小さな部屋が2つ、共用スペースに小さな台所、トイレとシャワーというシンプルなものであったが、若い学生たちには十分な設備であった。

唯一の弱点は寮の立地であろう。ITパークにほど近い徒歩圏内にあるとはいえ特区を外れており、ゴミの散乱や区内では感じないような治安面での不安があった。短距離ではあるができるだけNILSが手配しているジープニー(乗合自動車)を学校往復に使うことが必須だと感じた。これについても後述する。

2.2 SEIHA English Network

この学校は日本全国に426の拠点を持つセイハ英語学院のフィリピン校で、日本では主に幼児英語教育に力を入れていることもあり、現在のところは親子での英語留学を主な対象にした施設だといえるだろう。しかし最近完成したばかりであるということで教室や備品

はとてもきれいで、さらに学校は高級ショッピングモールであるアラヤモールのすぐ近くにあり、便利であると同時に治安の面でもかなり安定していた。

この学校の特徴は自前の寮を持たずに近隣のホテルと契約を結んで寮として利用していることである。宿泊場所にある程度の品質やサービスを求める場合には併設型の寮がある学校よりも適しているといえる。

また非常にしっかりとした日本人および日本語が堪能なスタッフがおり、そのひとりである名門フィリピン大学の出身であるというスタッフは現地大学であるセブ工科大との強いパイプを持っており、大学生との交流をアレンジすることはすぐにでも可能であるとのことであった。

ホテル滞在および現地大学との交流が可能である点などから、将来的に長期工場見学の目的地としての可能性を感じさせる学校であると感じた。

2.3 セブ英語クラブ

この学校はセブ島とは橋でつながるマクタン島に位置している。とてもこじんまりとしていてアットホームな雰囲気があるという点でほかの学校とは一線を画していた。チーフである教員が作成したというオリジナル教材を使用していたが、さまざまな英会話の場面や海外生活で日本人がつまづきそうなポイントを的確に押さえており、教員としての視点の確かさを感じさせる内容であった。実際に言葉を交わす機会があったが、人間味あふれる優秀な教師であるとの印象を持った。学校が小さいこともあり、その教員が担当する授業を中心に運営されており、そういう点では教師のあたりはずれが少ない学校であるといえるであろう。また小さいがゆえに留学生の細かいニーズに対応することができ、例えば「英語での学会発表と質疑応答」などを目標にしたプログラム編成にも柔軟に対応してもらえるとのことであった。

寮は学校と同じ建物の上の階にあり、通学の必要がない。そして通りを挟んだ反対側にはショッピングモールがあり、生活には便利である。

食事の定評が高いことも特徴の一つである。1階には地域で有名な日本食レストランがあり、セブ島では珍しい「刺身」が出されることもあるという。また屋上にある朝食会場からの雄大な海峡の眺めは、多忙な留学生活のいい息抜きになるであろう。

2.4 SMEAG

学校の規模が大きく学生数も多いため、まるで小さめの大学に在るかのような印象を与える語学学校であった。併設された寮にはジム、コンビニ、カフェ、ATM、クリーニングがあり、基本的な生活は学内で完結するようになっている。さまざまなニーズに応じたコースが提供されており、例えば英会話、Cambridge 英検、TOEIC、ILETS、TOEFL など本人のニーズに合うコースを選択することができる。

偶然視察中に教員研修を目にすることがあったが、経験豊富な教

員が小グループのリーダーとなり、技能を伝えるための研修会を定期的に行っているそうである。

全体的な完成度の高さを感じさせる学校であった。

2.5 EV Academy

学校施設の美しさでは抜きんでており、まるでリゾートホテルを思わせるようであった。映画を見ながら学習するためのシアタールームは小さめの映画館さながらで、施設内にあるジム、カフェ、プールのクオリティもとても高かった。朝夕には建物の前にある芝生でダンスやヨガのプログラムが実施されるそうである。

同じ建物内にある寮の部屋はまさしくホテルの部屋のようにであり、おちついた環境で英語学習に専念したい人には最適であろう。

英語教育にも長い実績があり、特に朝から晩まで英語漬けで学ぶ「スパルタ方式」と呼ばれる学習方法には定評があるとのことだった。

偶然熊本高専の教員が英語研修のために滞在していたが、いろいろ調べたうえでここを選択したという言葉には納得させられた。

3. 留学後アンケート・聞き取り調査および

英語成績の変化について

4名の留学学生に対して留学終了後に選択式アンケートと聞き取り調査を実施した。調査はそれぞれの学生に教員室まで来てもらう形で行った。また、英語能力の変化を探るために留学前後の英語成績を比較した。

3.1 アンケート

アンケートは5件法の質問14問で構成され、以下の6点に対する評価を測定した。(付録1を参照)

- ①留学全般
- ②寮生活
- ③学習内容
- ④教員・スタッフ
- ⑤施設
- ⑥学外活動

3.2 聞き取りについて

アンケート実施に引き続き上記6項目についてひとりひとりに聞き取り調査を行った。

3.3 英語成績の変化について

留学学生の留学前4月実施と留学後9月実施のTOEIC Bridge テストの成績およびそれぞれのテストでの留学学生とそれ以外の学生の平均点の変化を比較した。また留学先の語学学校がプログラム前後に実施したテストの成績も考察に含めた。

4. 結果と考察

ここではアンケート・聞き取り調査で大きな特徴が見られた項目、および英語成績の変化について考察を行う。

4.1 アンケートおよび聞き取り調査について

表 2 に示すように「留学全般の評価」は 4.75 (最高 5 点、以下同) と極めて高いもので、この留学の満足度がとても高かったことがうかがえる。そして学生 4 名全員が最高点の 5 点をつけたのは「レッスン内容」「講師」「スタッフ」「オプションツアー」である。

レッスンでは前述のランメソッド、語彙、文法、グループでのスピーチ・プレゼン・討論などが行われたが、「強制的に英語を使われる」「難しいが勉強になった」「グループで楽しくスピーチやプレゼンができた」などの声が聞かれた。

講師については「先生がおもしろかった」「やさしく、ていねい」「話しやすい、フレンドリー」という感想であった。筆者も数名の講師との交流があったが、学生たちと同様「明るくフレンドリーで話しやすい」という印象を強く持った。1 時間の自由会話レッスンの後にはまるでフィリピンに友人が一人できたような気分になったほどである。

スタッフに関しては「とても対応がよかった」「困ったことがあっても話しやすい」「毎晩 8 時に寮に来てくれた」など、きめ細やかに対応してもらえたことが伺えた。初めての海外滞在である学生もいたことを考えると、このようなソフト面での質の高さは、最重要チェックポイントとして評価すべきだと思っている。

オプションツアーはボートに乗っての島巡り、アイランドホッピングを楽しむものであった。これに対する感想は「海がとてもきれいだった」「ほかの高専の学生たちと仲良くなれた」「いちばん楽しかった」などであった。実際 2 週間のスケジュールを見てみるとほぼ全ての日程が集中英語トレーニングであり、ひたすら学校と寮との往復に費やされる毎日であったことがわかる。そのような点を考えると、別の学生の「自然がいっぱいでほんとうにいい気分転換になった」という声もうなずけるものであり、このような留学プログラムには息抜きの企画も必要であることを痛感した。

レッスンに関連して、特徴的な教授法であると前述したランメソッドへの評価も 4.75 と高かった。これに対しては「きつかったけどいちばん役に立った」「文法や発音の指摘が多く、知ること、学ぶことが多かった」「しゃべり続けてのどがヤバかった。先生ものどがかわれるほどだった」「考える暇がないほどしゃべった」と感想を述べている。自由会話ではなかなか英語が出てこないレベルの学生たちにとって、英語を話し続けることを強制されるこのメソッドはかなり効果的だったのではないかと推測している。

逆に評価が低かったのは「食事」「滞在場所の環境」である。「食事」は最低の 2.75、「滞在場所の環境」は 3 であった。

まず「食事」については「口に合わなかった」「合うものと合わないものがあつた」「昼ごはんは冷えたものが多かった」「味付けが濃

く、辛いもの甘いものが多かった」ということである。ちなみに学生 4 人が利用したのは寮の一階にある Café DON DON というレストランである。この点についてはぜひ学校側に伝え、改善を要望したい。

滞在場所の環境について学生が指摘したのは寮周辺の雰囲気である。前述したように学校自体の環境は経済特区 IT パーク内にあることで極めて良好であったが、IT パークを一步出ると環境は激変し、寮までの歩道には毎日のように生ゴミが散乱している箇所があり、雰囲気もあまりいいとは言えなかった。IT パーク内に寮を設置することが理想的ではあるが、賃料の高さがそのまま留学費用にはねかえってしまうことが予想される。現時点では朝夕 NILS と寮の間で運行される専用ジープニー(乗合自動車)の利用を強く推奨しながら、どうしても徒歩で移動しなければならないときは必ず複数で行動することを徹底すべきであろう。

ただし以上の評価が低かった 2 点も、異文化体験・異文化理解という観点からみれば非常に貴重な機会であったともいえる。世界の中では日本こそが例外的な国だとよく言われるが、今回体験した食文化、住環境をはじめとした異文化を通して日本を見ることで、いま自分たちが暮らしている日本がどんな国であるのかを考え直すとてもいいきっかけになったと考えている。

	質問項目	平均
1	留学全般	4.75
2	寮の部屋	3.75
3	寮の施設	3
4	食事	2.75
5	学校のプログラム構成	4.75
6	学校のレッスン内容	5
7	ランメソッド	4.75
8	学校の講師	5
9	学校のスタッフ	5
10	学校の施設	4.5
11	大学との交流	4.5
12	企業見学	4.5
13	オプションツアー	5
14	滞在場所・街の環境	3

表 2 : アンケート調査結果

4.2 英語成績の変化について

表3は留学前4月実施のTOEIC Bridge テストと留学後9月実施のテストの成績変化である。

1名をのぞいて成績に伸びが見られ、特に2名には大きな伸長があった。留学学生4名と彼らを除く他の学生の平均点に関しても5.5点もの差で留学学生の伸びが上回っていることがわかる。もちろん成績向上のすべてを留学に結び付けることはできないが、付録2に示すようにプログラム前後に語学学校で実施されたテストの成績も大きく伸びていることと合わせて考えると、この留学が英語能力の伸長につながったことは疑いないだろう。

留学学生	201904	201909	点数の差
学生A	140	142	2
学生B	122	146	24
学生C	118	136	18
学生D	148	146	-2
平均点	132	143	10.5

他学生	201904	201909	点数の差
平均点	121	126	5

表3：TOEIC Bridge 成績変化

5. まとめ

今回の視察で最も感じたのはフィリピン留学の大きい優位性である。以下にその優位性を支える要因のいくつかを挙げる。

ひとつめとして、自分の学習スタイルに合わせてさまざまな学校を選択肢があり、さらに学習目的に合わせて各学校でさまざまなプログラムが準備されていることである。自分に合う環境の学校を選び、そのうえで会話・リスニング・文法・発音・TOEICやその他の試験など、目的に合わせて柔軟にプログラムを編成してもらうことができるのである。

次に留学中に豊富なマンツーマンレッスンを体験できることである。これは人件費が高い西欧諸国への留学では実現しにくいことで、フィリピン留学ならではの利点だといえるだろう。専用のマンツーマンレッスンブースや小部屋がどの学校にも多数用意されていた。

そして明るくフレンドリーでとても話しやすい講師たちである。極めて親日的で、西欧諸国ではときに感じるアジア人に対する差別感情のようなものに出くわすことは全くなかった。現地では語学学校の講師という仕事はかなりステータスの高い職種であるという印象を持ったが、そのことが全般的な講師の質の高さにつながっているのではないかと推測している。案内係から「アメリカ留学に失敗したあとフィリピンで留学をやり直している人が多い」と聞いたが、うなずける話であると感じた。

さらにフィリピン・セブ島には英語ネイティブ環境にきわめて近い環境が存在していることである。セブ島では小学校から母語タガログ語の授業以外はすべて英語で行われ、基本的にはほとんどの人が英語話者である。EF EPIによる「英語能力指数2019版」でのランキングでは、いわゆる非ネイティブ100ヶ国中フィリピンは第20位で能力レベルは「高い」と評価されている(日本は53位で「低い」)。学校を一步出ればそこに英語環境があり、その日学んだ内容をすぐに実践使用できることは大きなメリットである。

最後に留学費用が西欧諸国への留学に比べて安いことである。今回4人の学生が参加した2週間のプログラムは授業料、教材費、学外研修費、学校と寮の間の交通費、宿泊費、1日3回の食費などのすべてを含んで15,800円であった。マンツーマン、少人数レッスンが多かったこともあわせて考えると非常に安価だといえる。また、セブ島は日本から比較的近いので往復の航空運賃は7万円程度と低く抑えられている。そして直行便なら片道約5時間とヨーロッパやアメリカへの渡航に比べ身体的負担が少ないことも海外旅行経験の少ない学生にとっては好条件のひとつであろう。

以上のように高専学生によるフィリピン留学には大いなる可能性があると強く感じた。今後も学生のフィリピン留学を促し、国際感覚豊かなエンジニアの育成を図っていきたい。そして留学参加学生のデータをさらに集めて研究の精度を高めながら、フィリピン留学プログラムのいっそうの改善につなげていきたい。

6. 謝辞

フィリピン・セブ島滞在わずか2日間で8つもの現地語学学校を訪問し、各校の担当者としつかりとした面談をすることができたのは、ひとえに本視察に同行してくれた(株)オーバースーズ情報センターの西村和寿氏のご尽力によるところである。ここで深く感謝を申し上げる。また、たいへんなご多忙の中、私たちの訪問を快く迎えてくれた各学校の担当者の方々にも心からの謝意を伝えたい。

7. 参考文献

EF EPI 英語能力指数2019版。

<https://www.ef.japan.co.jp/epi/> (参照2019年12月2日)

(2019年11月5日 受理)

付録 1 : 留学後アンケート

留学に関する調査

本調査は留学についての理解を深め、よりよい留学を実現するために行っています。これはテストではありませんので、「正しい」答えも「間違った」答えもありませんし、成績とは一切関係ありません。以下のアンケートではあなたが留学について感じることを素直に答えてください。有意義な調査にするためには、正直に答えてもらうことが不可欠ですので、どうぞよろしくお願いします。このアンケートでは守秘義務の履行を約束します。アンケート結果は統計的に処理され、個人を特定できるような情報が開示されることはありません。 北九州高専 渡辺眞一

以下のそれぞれの記述について、自分の留学体験にもっともあてはまる番号に○をつけてください。

		とてもよかったです	よかったです	どちらともいえない	あまりよくなかったです	悪かったです	
1	今回の留学全般はどうか	5	4	3	2	1	
2	寮の部屋はどうか	5	4	3	2	1	
3	寮の施設はどうか	5	4	3	2	1	
4	食事はどうか	5	4	3	2	1	
5	学校のプログラム構成はどうか	5	4	3	2	1	
6	学校のレッスン内容はどうか	5	4	3	2	1	
7	カランメソッドはどうか	不体験	5	4	3	2	1
8	学校の講師はどうか	5	4	3	2	1	
9	学校のスタッフはどうか	5	4	3	2	1	
10	学校の施設はどうか	5	4	3	2	1	
11	大学との交流はどうか	不参加	5	4	3	2	1
12	企業見学はどうか	不参加	5	4	3	2	1
13	オプションツアーはどうか	不参加	5	4	3	2	1
14	滞在場所・街の環境はどうか	5	4	3	2	1	

☆ご協力ありがとうございました

付録 2 : 語学学校 NILS による留学プログラム実施前後テスト得点比較

留学学生	プログラム 実施前	プログラム 実施後	点数の差
学生A	30	49	20
学生B	37	44	7.5
学生C	32	42	10.1
学生D	31	36	5
平均点	32	43	10.5